



早生・中生種精算報告会開催

12月18日、本所、相馬ふれあい館にて、早生、中生種精算報告会を行った。

このうち、相馬ふれあい館には30人ほどの生産者が訪れ、本年の販売動向や生産情報などが話された。

三上隆基専務理事は、「本年産は去年に比べ生産量が多く、生産者の方々は大変忙しかったと思います。よって平成26年以來の81万箱以上の入庫となりました。皆様に在庫して頂いたりんごは責任を持って販売していきます。」と本年産りんごの販売を意気込んでいた。

続いて農業振興課米澤主任が本年産の生産を振り返り、「6月中旬から7月下旬の降雨による輪紋病の発生が目立ったことから防除に苦慮する生産者が見られたことや、9月以降も猛暑日が続いたことにより、つがるを中心に日焼け果や、着色遅れが見られた。」と説明した。

続いて東京青果の渡邊勝俊審議役から市場情勢が話された。

「本年産は青森県を含めて生産量が増えている。今年は私も10月中と12月の2週間、弘前に居て何日かリンゴ園でふじと王林の収穫作業を手伝いました。この作業を一日中やるのはかなり大変だと感じた。生産者の努力に改めて敬意を表すとともに、少しでも生産者の方に良い精算をお返しできるようにJAとタイアップしながら販売していきたい。」

また、早生種についてこれからも温暖化の関係でつがるの着色不良は懸念される為、つがるに代わるような品種を作るべき時が来るのではないかと感じている。

年明けには比較的消費者の方に買いやすい価格で推移すると予想されている。美味しく、密が入っている果実が多いと感じているが、試食販売が出来ない事が難点である。市場とJAの連携を駆使しながら皆様に満足のいく販売をしていきますのでよろしくお願ひします。」と生産者へ語っていた。



生産者へこれからの市場状況を熱く語る渡邊審議役



精算書を手に多くの生産者が訪れた